

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷三十第

行發日一月十年十正大

論叢

所得稅の弱點

法學博士 神戸 正雄

社會的法的經濟學の考察

文學博士 米田 庄太郎

利潤の經濟的及び道德的性質

法學博士 田島 錦治

農業勞働問題

法學博士 河田 嗣郎

時論

地方稅の整理を論ず

法學博士 小川 郷太郎

說苑

家計論の地位に就て

法學士 作田 莊一

井リヤム・タムスンの分配論

經濟學士 堀 經夫

雜錄

獨逸側より見たる聯合國の對獨經濟政策

法學士 小島 昌太郎

世界戰爭と柏林の人口

法學士 汐見 三郎

井リヤム・タムスンの分配論 (三・完)

堀 經 夫

序言 タムスンの經濟學史上の地位

第一章 タムスンの根本思想

第二章 自由競争の上に立つ經濟組織の檢討

前號及前々號既載

第三章 相互協力の上に立つ經濟組織の檢討

第一節 經濟組織の移動性

協力主義の特徵——第三節平等と安固(一)平

等(二)安固——第四節相互協力主義の長所及

び缺點(一)長所(二)缺點(三)實行は可能なりや

本號所載

結論

第三章 相互協力の上に立つ經濟組織の檢討

第一節 經濟組織の移動性

余は、本論文の第一章及び第二章に於て、タムスンの分配論上の根本思想及び之を自由競争の制度の上に立つ經濟組織——其の最上なる形に於ける——に適用して判斷したる場合の諸結果に就て、解説を試みたのであるが、若し社會の經濟組織にして永久不可變のものであるならば、吾々は、分配の平等の理想を斷念して、タムスンの所謂平等なる安固、即ち安固によつて制限せら

れたる平等、の實現を以て最終の理想とするの外は、無いであらう。

併し乍ら社會制度は、時代の推移と共に變遷するものでも。タムスン曰く、

『筆者(タムスン自身を指す——譯者註)は、彼れの一生涯を通じて、或る一定せる道德的特性(道德律の意に解するも可ならんか——譯者註)によつて取巻かれて居るし、分配上の或る制限と或る特色とを目撃するに慣れて居るので、稍ともすれば、此等のものが、彼を取圍んで居る所の自然の風色と同じ様に、固定せるものであるかの如く、考へ勝ちである。自然の風色——如何にそが狂暴であり、若くは彼れの幸福にとつて無用又は有害であつても——に驚嘆して、その前に屈服すべく、彼は幼少の時より訓練されてゐる、蓋し彼は、自然が超人間力によつて創造されたものであると話し聞かされて居るが故に。現存の制度及び其の結果を嘆美するに當つても、彼は同じ様な驚嘆の眼を以てその前に屈服すべく訓練されてゐる、蓋し此等のものは、或る場合には人間の智慧によつて、又或る場合には超人間の智慧によつて指導されたる所の、人間の力の創造せるものである、と彼は話し聞かされて居るが故に。それが何であらうとも、彼はそれを尊敬すべく教へられてゐる、彼れの行爲を、現存の制度に適應せしむるやうに、彼は強制されてゐる。²⁵⁾』

更に之に續けてタムスンは、現存の諸制度が絶対の價値を有する最終のものにあらざることに就て、述べて曰ふ。

『扱て、過去に於ける最上の構造を有する風車、或は或る特定の國に於ける構造(風車の)の絶対

的方法が、此等の機械（風車の意——譯者註）を製作するに最も良い方法は何であるかといふ問題を解くに當つて、決して良い指導を與へないが如く、或る特定の國に於ける富の創造及び分配に關する絶對的便法、或は過去に於ける其の便法も、富を創造し之を分配する最上の方法に關して、最終のものたることは出來ない。』

是に由て觀れば、タムスンが社會の經濟組織の移動性を認め、且つ最終の理想——即ち彼に就て謂はゞ、最大多數の最大幸福——を達する爲めには、幾多の制度、組織の變遷が必要であり又可能であることを信じゐたることは、既に明白であらう。然らばタムスンは、自由競争主義の次に來るべき制度を如何なるものと考へたか。そは取も直さず相互協力主義に基く社會組織である。

タムスンはベントナム主義より出發したが、終に之を乘て、オウエン主義に走つた、と普通に謂はれて居るのは、恰も這般の事情を指稱するものである。レズリー・ステイヴンは、其の著『英國功利主義者』に於て、タムスンとベントナムとの關係に就て次の如く論じてゐる。

『彼（タムスン）を指す——譯者註）は、「最大幸福の原則」が社會問題に當て嵌るものと認めた。彼はベントナムの根據に立つて平等といふことを主張した。……又ベントナムと共に、彼は「安固」といふことの重要なことを承認した。……併しベントナムと違つて、彼は平等を以て安固よりもより重大であると看做した。彼にとつて主要なる問題は、少數人の手に富の巨大なる蓄積をなすことより生起する所の、恐ろしき弊害を考ふことに在つた。……』²⁶⁾

實にステイヴンの言へる如く、タムスンもベントナムも、共に平等と安固とを重要視したけれど

も、ベンタムは、生産を多くすることが最大幸福を進むる所以であると考へ、自由競争主義の經濟組織を是認したので、平等よりも寧ろ安固の方をより、緊要なるものと看做したるに反し、タムスは、既に第一章に於て余の説明せし如く、平等なる分配による功利主義の實現を以て終始彼れの理想となしたるが故に、安固と平等とが相一致せざる場合には、寧ろ後者をより、重要視したのである。是に於て安固といふことを條件としてのみ成立つ所の自由競争主義に代るべき制度であつて、平等を實現するにより適當なるものあらば、制度の移動性を認むる彼は、何等の躊躇なく之を採用することが出来たのである。『ニウ・ラナアクのロバート・オウエン』が創始せる相互協力主義に、タムスは其の索むる所のものを見出した。『分配論』に於て彼は、未だ明確なるオウエン主義者とはなつてゐないけれども、其の論調より察して、彼がオウエン主義に賛意を表したることは、疑を容れざる所である。余はタムスが、『分配論』に於てオウエンの相互協力主義を如何に觀たるかを、次に研究するであらう。

第二節 相互協力主義の特徴

自由競争主義に代るべき制度として、相互協力主義が、果して平等の原則を、従つて最大幸福の原則を、實現し得るや否やを觀る前に、余は、オウエンの相互協力主義の特色であるとタムスが看做して居る所のものを、簡単に摘出するであらう。

一、オウエン主義によれば、或る數の個人——各事情によつて其の數は必らずしも一定しないが、先づ三百人から千人若くはそれ以上の人々——が、任意に相結んで、科學及び技術の力を藉

つて、共勞によつて、彼等の幸福に役立つ所の富の最大量を生産し、而してそれを共同に使用し且つ享樂することになる。だから供給と需要とが常に相合致して剩餘の富といふものがない。

二、此等の共產體は、其の構成員の健全にして愉快なる生存を保持するに必要なだけの土地

——例へば一人宛に一エーカーから一エーカー半の割合の土地——を耕作し、餘分の勞働力は、之を有用なる衣服、住居、及び家具の製造に向け、更に餘れる勞働力は、之を贅澤品の製造に、他の社會に對する交換用の貨物の製造に、借金を支拂に必要な貨物の製造に、又は課税金の支拂に必要な貨物の製造に、用ふることとするのである。餘分の勞働を製造業又は農業に向ける場合には、其の種類分量等は、土壤、自然的產物、市場、技術、資本等の諸條件を參酌して決せらるべきである。

三、各人及び各家族が生活上の餘裕を生じて、若干の貯蓄をなすに至るならば、彼等は、彼等の住居の建築及び必要なる原料や機械の購買の爲めに足るだけの金錢を寄附し、そうして健康と便利とを圖ることが出来るやうな地位に之を建設する。彼等が更により、富んで居るならば、彼等は土地の購入の爲めに、金錢を献ぐるであらう。

四、若し彼等各員が左程富んでゐないならば、土地を賃借し、住屋及び他の建物又は原料等を借用する。彼等の勞働の果實が地代に對する擔保となる。

五、各人は、共同貯藏物よりして衣服食物を給與せられ、子供及び弱年者は、其の性及び年齢に應じて、異なる共同寄宿舎にて寢起する。獨身者は各々私室を占有し、結婚者又は二名の男又は二名の女が一緒に生活せるものは、二つの部屋を占有し、而して總ての人は、食事、讀書、講

義、娛樂等の爲めに、公けの部屋を使用することが出来るやうになつてゐる。私室の數は、其の共產體の資金の豊富度如何によつて、及び人々の便利觀念によつて、増加される。

六、此等協力労働者の労働力をより生産的になし、彼等をより健康に且つより愉快にする爲めに、彼等を農業と工業とに交替的に使用さるゝことにする。されば彼等の中に、總ての技術によく熟練してゐて、總ての人々に順次に知識と技術とを教へることが出来る人の居ることを必要とする。若し彼等の仲間にかゝる人がゐないならば、他の團體から之を傭入れることにする。醫者や藥劑師なども有用なる人々である。

七、社會の労働生産力を増加する爲めに、婦人を育児——但し二歳以上の子供の育児——及び家庭料理の煩雜より解放して、子供の教育及び食事を公けの機關によつて行ふことにする。

八、兒童に完全なる教育——知情意の圓滿なる發達を圖るやうな——を施す爲めに、該共產體の公けの費用によつて——(貧しい時は他より借入れて)——種々なる設備をする。教育の計劃は、共產體構成員の同意を経るを要す。

九、思想及び宗教の自由を始めとして、他の總ての事柄に關する完全なる自由、これが社會の不可侵なる法則である。

十、共產體の政治は、最も適宜なる方法によつて選舉せられたる委員によつてなさるゝが、政治的權能は成年の男女が總て之をもつてゐる。賞罰は總て輿論の善惡によつて決定せらるゝのみである。

十一、藝術及び科學は、社會の幸福を圖る上に最も必要であるから、團狀員の或る者が之を習修することは、許さるべきである。彼等の餘分の時間は、教育、講義等によつて彼等の知識を普及する爲めに用ひらるゝのである。

十二、各員間の誤解は、適當なる仲裁手段によつて解決せらるべく、後に禍根を残さないやうにする。各人間の誤解、言つても、個人的富に關する争は總て除去さるゝであらうから、極めて稀なるものであらう。

十三、各員は一つの共產體を去つて他の適當なるそれに移るの完全なる自由を持つてゐる。又研究の爲め必要なる時は、他の共產體に於て時を過すことは自由である。

以上タムスンがオウエン主義の特徴なりとして列擧せる所を観る時に、吾々は、そがタムスンの懷ける理想を實現するに極めて有利なる條件を備へて居ることを感得するであらう。余は以下節を改めてそのことに言及することとする。

第三節 平等と安固

(一) オウエンの相互協力主義の特色である、とタムスンが觀たる所のものが、果して彼れの理想に合致せるものなりや否や、を檢せんと思せば、吾々は勢ひ、タムスンの功利主義及び其の實現の唯一の手段たる分配の平等といふことゝ、相互協力主義との關係を、研究しなくてはならない。

オウエン主義によれば、若干の人々が任意に相結んで共同の目的の爲めに働らくのである。(前節の(一参照)。このことは取も直さず個人的の自由競争を廢することである。従つて各個人の勞働

の目的は、自己の富を増加することになくて、共同の富を多くすることに在る。自己の富を増加せんが爲めに各個人——種々なる點に於て相異つて居る所の——が競争的に勞働をなす場合に、所謂弱肉強食の世の中が出現し、其の必然的結果として富の分配の不平等及び幸福を享受する程度の懸隔が生起するのである。然るに社會各人の勞働の目的を共同の幸福の増進といふことに置き、各人の利己の念を除くことが出来るならば、富が少數人の手に集中されて、他の大部分の人々は殆ど其の享受に與り得ないといふが如きことなく、各人は平等に富及び幸福を享けることが出来るであらう。而かも社會各員の需要に應ずるだけの分量に於て富を生産するが故に、生産過剰といふが如きことは起り得ないであらう。

次に富の生産といふも、餘力の存する限り生活必需品の生産より贅澤品の生産に進み、其他無形の財寶たる學問藝術の研鑽にも及ぶが故に、(前節の(二)及び(十一)参照)、自由競争の今日に於ては極めて少數人が獨占して居るに過ぎない所の有形無形の富が、總ての人々に行き亘り、こゝに大多數の最大幸福が實現さるゝであらう。

又共產體の各員は、共同に土地、家屋、原料、機械等を所有又は使用するが故に、(前節の(三)及び(四)参照)、少數の土地資本所有者に不勞所得を支拂ふことによつて、大多數の貧民が其の幸福を奪はるゝ様なことが絶無となるから、それだけ社會の幸福は増進さるゝであらう。

又幼年者は、公けの費用によつて衣食住を給與せらるゝのみならず、平等に立派な教育を授けらるゝが故に、(前節の(五)及び(八)参照)、今日往々にして見るが如く、有爲の才能を懷きつゝ之を發育

せしむることが出来ないといふが如き不幸は、絶對に起り得ない。

又社會各員は、教育の力によつて種々なる技能を會得し得るが故に、(前節の六參照)、無趣味なる仕事に己むなく従事するといふが如きことなく、且つ任意に仕事を變換することによつて、單調といふ不快より脱出することが出来る。これ實に各人の幸福を増進するに缺くべからざる事柄である。今日の分業労働者の單調不快なる労働を願れば、思半ばに過ぐるものがあらう。

又婦人が、其の育児より及び其の臺所より解放されて、生産事業に従ふことゝなれば、(前節の七參照)、生産力の増加、従つて富及び幸福の増加は、著しきものがあらう。

又宗教及び思想の自由は、(前節の九參照)、各人の精神生活を豊富ならしむる所以であつて、社會の幸福を進むる上に於て極めて有力なる方法である。

最後に共產體の政治がデモクラティックであるから、(前節の十參照)、政治が自分達全體の爲めの政治であるといふことよりして、社會全體の幸福の爲めにそが行はるべきは、火を賭るよりも明かなる事柄である。

以上オウエン主義を精査したる所によつて見れば、其の特質なりとしてタムスンによつて擧げられたるものは、悉く彼れの理想である所の最大幸福の原則に適應し、而して其の達成の手段として、富の平等なる分配といふことを骨子となして居ることが、明かであらう。タムスンがオウエンに就て、

『相互協力と分配の平等といふことが彼れの道具であつた。如何なる言葉で彼は彼れの思想

を言表はして居らうとも、このことは、深き思索と、比ひなき實際的知識との稀なる結合、偉大なる組合せ、の眞實にして賞嘆すべき目的であり、且つ其の結果である、——幸福の増進といふことに思を凝らしてゐる總ての人々の注目を惹いたのは、正にこの點である。』

と謂へるは、至言たるを失はない。

斯くて分配の平等といふことは、相互協力主義の社會に於て、始めて其實現の端を見出すことゝなつたが、然らば自由競争主義には必要である所の分配の安固といふことは、相互協力主義の下に於ては如何なる意味を持つに至るであらうか。又そは平等の原則と如何なる交渉を有つに至るであらうか。次に此點に就て考ふる必要がある。

(二) 分配の安固とは、前にも述ぶる如く、社會各人をして其の勞働生産物の全部を收得せしむること、即ち勞働全收を各人に確保することを謂ふ。

今之を相互協力の社會に就て見るならば、此の意味に於ける安固は全く顧られてゐない、と謂はなければならぬであらう。何故なれば、相互協力の社會に於ては、其の名の示す如く、各員が共同消費の目的のために共勞し、而して平等に生産物を享受するものなるが故に、第一に、智力及び體力を異にする各員が、夫々如何程の勞働量を提供したるやに就て計量することが困難或は不可能であるのみならず、第二に、各員は其の勞働量の如何に拘らず平等なる分配を受くのであるから。

抑も、廣く分業の行はれて居る今日に於て、各勞働者が如何程の勞働を提供して如何程の生産

物を創造したるか、を定むることは、殆ど不可能であると言はなければならぬ。古に於けるが如く、自云で飛道具を拵へて單獨で山に獵をなすといふことであるならば、其の獲物は悉く其人の生産物であるけれども、今日に於けるが如く、他人の資本財を使用して工業農業に従事する場合には、生産物の何れの部分、如何なる分量が、各労働者の生産せしものであるか、を定むることは出来ない。労働時間の長短といふが如き單なる量的の尺度を以て各労働者の生産せし分量を定むることは、實際上無意味である。されば此の點に於て、自由競争主義、個人主義の制度を前提とするも、労働全收といふ考は、理論上は推理し得られても、實際上は全く實行し難き事柄に屬することとなる。ペンタム、タムスン等が、自由競争主義による社會制度の下に於て、分配の安固即ち労働全收權を主張したのは、理論上は兎も角、實際上は不可能事を稱へたるものと評せざるを得ない。²⁷⁾

況んや相互協力主義による社會に於ては、労働全收の思想は、全然無意味のものである。是に於て問題となつて來るのは、タムスンが、オウエンに就て次の如く謂へるは、如何なる意味であるか、といふことである。曰く、

『或る人があつて、大膽にも、「如何にして分配の平等といふことを完全なる安固²⁸⁾といふことと一致せしむべきや」といふこの大問題を、合理的原則に基いて解決せんと企て、且つ之を發表した。此人こそはスコットランドのニウ・ラナアクのオウエン氏である。』

タムスンは、オウエンが相互協力主義によつて平等と安固とを完全に調和したと言つてゐる。

27) 此事に關する見解は、河上博士著『社會問題研究』第二十二冊に掲げられたる論文『労働收益全部に對する權利に就ての一考察』に詳しく論ぜられてある。

28) Distribution, p. 384.

而かも前述せる如くこの事は不可能である。さらばタムスンのこの言を如何に解すべきか。

余は、タムスンの此の言葉を解釋する爲めに、彼れの他の文章を引用することを必要とする。

彼は前記の文句の次の段落に、

『……個人的安固の制度は、再生産を確保するの必要よりして平等に制限を加ふることを要求するが、他方に社會的安固の制度は、平等なる分配の全き享受に對して、何等の制限をも要求しやうとは爲ない。』²⁹⁾

と謂つて居る。是に由て觀れば、タムスンが、オウエン主義は分配の平等と安固とを一致せしむるものである、と言へる場合の安固とは、所謂個人的安固の謂にはあらずして、社會的安固の謂であらねばならないといふことが、明白であらう。社會的安固、其の意味は、各團體が自己に屬する各員の勞働生産物を、全部その團體の所有となす、といふことである。而して此の意味に於てあるならば、相互協力主義の社會は、分配の平等といふことゝ、安固といふことゝを一應調和せしめたるものと言ふことが出來やう。何故なれば、各員に平等に分配さるゝ所の富は、社會各員の共勞の結果であり且つ其の全部であるからである。

併し乍ら、安固の意義をかく解することは、實に安固の原則の本來の意味を全く無價値のものたらしむるのみならず、分配の平等といふことに相對する意味を有するものとしての安固なる概念の成立を不可能ならしめ、延いては此等兩者の調和といふが如きことを全く無意味のものとなすであらう。蓋し、安固といふ原則が認めらるゝに至りしは、各個人に其の勞働の結果を全部收

得せしむることを目的とし且つ此事に對する論據を與へんが爲であつたのに、社會的安固といふことになれば、全體が全體を支配する權利をもつて居るといふ、極めて平凡なる事柄を指稱するものとなるが故であり、又個人的平等といふことゝ社會的安固といふことは、特に調和さるべき價值を有せざる二つの別種の事柄であるが故である。

是に由て觀れば、オウエンの相互協力主義に基く社會は、——タムスンが平等と安固との完全なる調和を得たる社會であると言ひしにも拘らず——安固（タムスンの所謂個人的安固）といふことゝは全く相容れざるものであつて、従つて平等の原則のみを實現する所の社會である、といふことが明かとなつたであらう。斯くて平等と安固とは、矢張り兩立し難いものである。

第四節 相互協力主義の長所及び缺點

(一) 相互協力に基く經濟組織が、平等といふ原則を實現するに最も適當なることは、上來述べたる所よりして明かであるが、タムスンが相互協力主義の他の長所なりとして列擧したるものを擧ぐれば、次の如くである。

第一は、不生産的消費による浪費が省かれ得ることである。相互協力主義によれば、總ての人が生産的勞働者であつて、怠惰なる資本家や地主の如きものがゐない。故に不生産的勞働といふものが有り得ない。³⁰⁾

第二は、生産的勞働を無智の爲めに浪費せしむるが如きことはないといふことである。自由競争は各個人の營利主義を是認する、從て利の在る所には、總ての人が何等の計劃もなく盲目的に

30) Cf. *ibid.* pp. 393, 394-397.

生産力を集中する。生産過剰といふが如き生産的労働の浪費は、かゝる事情より發生するのである。然るに相互協力主義によれば、生産的労働の指導が極めて計劃的に且つ賢明に行はるゝが故に、以上のやうな浪費は有り得ない。³¹⁾

第三は、商人の利潤といふが如き無駄な費用が入らないことである。何故なれば、協力者は總て共同資本家であり共同所有主であり、而して生産と消費とは總ての人によつて平等に分割されるから。³²⁾

第四は、貧乏、無智、放任といふが如きことより健康を害し生命を失ふといふことが無くなることである。資本家に對する利潤、地代といふが如きものが廢せらるゝことゝなれば、自然各員に對する報酬が多くなつて、貧乏を免れるのみならず、教育の進歩、醫術設備の完全は、多くの生命と疾病とを救済するであらう。³³⁾

第五は、惡徳及び犯罪により幸福が減少せしめらるゝのを防ぐであらうといふことである。個人と個人とが、富の獲得の爲めに相争ふ所に、今日の殆ど總ての犯罪と惡徳とが潜んで居る。されば個人的自由競争を撤去せば、此等のものゝ大部分が消滅すべきは、明白であらう。³⁴⁾

而して最後に第六は、供給と需要とが相一致するが故に、人口の問題とか、道徳の問題とか、立法の問題とか、種々なる錯雜せるものが、極めて簡單に且つ正確に解決さるゝことである。今日の人口問題は、主として食物と人口との増加率の差といふことより發生するのであるが、少數人の手に多量に貯藏されてある所の食物を解放し、而して總ての人が共同消費の爲めに生産に従事することになれば、供給は常に需要に應じて増減さるゝことゝなつて、供給不足といふが如き

31) Cf. *ibid.* pp. 393, 397-403.

32) Cf. *ibid.* pp. 393, 403-406.

33) Cf. *ibid.* pp. 393, 406-415.

34) Cf. *ibid.* pp. 393, 415-421.

惡結果を生むことなく、從て人口制度といふが如き聲を聞くことは無くなるであらう。『慰樂が增加すれば、無思慮なる出産が必然的に起つて來るであらう、』といふが如き論者の前提は、歴史上の事實に徴するも、又人間性に就て考察するも、全然誤れるものなることが明かである（その證明の爲めにタムスンによつて掲げられたる諸例は、之を省畧する。）從つて相互協力主義によつて増加するゝであらう所の慰樂も、決して人口問題を惹起すやうなことはない。從て之に附隨して起つて來る道德上、立法上の問題の解決も極めて簡單である。³⁵⁾

(二) 以上は相互協力主義の長所であるが、これにも重大なる缺點の附隨せることを忘れてはならない。その最も重要なものであるとしてタムスンが擧げたるものは、丁度自由競争主義の長所に相當するものであつて、即ち個人的安固といふものが無くなれば、各員の生産力が減退し從て社會の富が減少するであらう、といふことである。此點は蓋し最も考慮を要する事柄である。何故なれば、各員の生活が保證さるゝことになれば、各員は自己の生活に直接の利害關係を感ぜざるが爲めに、自ら其の勤勉の度を緩めるに至るであらうから。而かも各共產體は法律などによる外部的強制手段を認めざるが故に、各員の努力の減退は、之を各員の内部的自覺によつて防ぐの外なきことゝなる。³⁶⁾

次に、若し彼等團體の政治的權力を委ねられたるものが、その權力を利用して公的掠奪を行ふことゝなるならば、輿論の制裁以外の制裁を有たざる所の公衆は、少數の權力者によつて其の勞働生産物を苦もなく奪はれて仕舞うであらう。斯くては社會的秩序が全く維持せられざることゝ

35) Cf. *ibid.* pp. 393, 421-432.

36) Cf. *ibid.* pp. 432-435.

なり、延いては各員の生産力の減退といふことに及ぶであらう。之が救済手段としては、各員に社會的不秩序の害の如何に恐るべきものなるかを知らしめ、以て相互協力主義の本來の意義及び目的を常に明確に意識せしむるの外はない。³⁷⁾

(三) 相互協力主義には以上述ぶるが如き長所と缺點とがある。併し人類の幸福を進むる上に於て、其の長所は其の缺點に比して遙かに優勢である。是に於て、唯一つの問題として最後にタムスの考慮を促したるものは、相互協力主義の實行が可能であるか、といふことであつた。

多くの經濟學者、立法者、又は倫理學者は、オウエン主義を詳かに検討し之を十分に了解しやうとも爲ないで、之をたゞ空想的のものであるとして排斥する傾がある。タムスは斯かる人々を評して、『自分(オウエンによつて)提起されたる目的を達成するの手段を知らないから、それ故にそは達成し得られざるものである』³⁸⁾かの如く誤想する者である、と嘲つた。

此等の反對論者の多くは、人間の勞働をしてより生産的ならしむるものは利己心の外にないとの傳統的なる考よりして、この利己心の自由なる活動を否認する所の相互協力主義に反對して居るやうである。之に反しタムスは、かゝる傳統的なる考より脱出することによつて、茲に相互協力主義の上に立つ社會制度の實現の可能性を信するに至つた。

如何にも、人類の理性及び知識が發達しない間は、利己心といふこと——タムスは之を不自然的(人工的)動機と呼んだ——が生産力の振張を圖る唯一の手段であるであらう。併し乍ら、理性や知識の發達と共に、人類は必らずしも利己心といふ動機によらなくとも、タムスの所謂

37) Cf. *ibid.* pp. 435-442.

38) *Ibid.* p. 443.

自然的動機——人間の精神的自然法則の必然的結果（例へば或る人が虚言を吐きたる場合に、彼は將來に於て他人の信用を失ふ、といふ結果を蒙るが如し）を考慮することが、吾々の行爲を支配する場合をいふ——によつて、自己の感官の満足のみならず、同胞の幸福をも圖る、といふ純利他的且つ社會的な相互主義の行爲に出づるものである。

タムスは、右の如く考ふるによつて、相互協力主義を否認する者の議論に駁撃を加へたのである。蓋し、彼が斯くの如く人類の理性及び知識の或る程度の發展性を認めたのは、彼が人間を全く機械的に觀察してゐない證據であつて、此點に於て彼はマルサスと趣を異にして居る譯である。斯くてタムスに據れば、相互協力主義は、各人の理性と知識との發達を前提として、その實現の可能性を有するものである。彼曰く、

『理性こそは、斯かる變革を爲し遂ぐるに最も價值がある所の、唯一の要素である。³⁹⁾』

余が本論文の最初に、タムスはゴドキンの思想をも取入れて居る、と云ひしは、這箇の消息を傳ふるものである。（註）

（註） タムスは、『分配論』の開卷劈頭（緒言）に於て、經濟學及び其他の社會的學問を研究する學者に、二程の類型がある、ことを述べ、一を理智的思索家、他を機械的理論家と呼んでゐる。

理智的思索家は、一言を以て覆へば、自分自身の社會的環境が順である爲めに、彼れの人間としての動物的原始的欲望の充足に意を用ふるの必要がなく、其の結果として人間の下等なる諸性情は、之を理性の力で以て容易に制御し得るものと考へ、従て人間といふものは、『從屬的な物質力より始り、獨立して、彼れの意思力のみによつて、（本統の）幸福を獲得すること⁴⁰⁾が出来ものである』と主張する人を謂ふのである。タムスは、この類型に屬する學者として、彼の有名な『政治的正義』

39) Ibid. p. 579.

40) Distribution, Preliminary Observations, p. III.

の著者ゴド井ンを擧げてゐる。

機械的理論家とは、前の者とは正反對に、人間の行爲を支配して最大の幸福を追はしむる原動力となるものは、決して理智とか同情とかいふものではなくて、最大の富を手に入れやうといふ、殆ど本能とも稱すべき欲望その物である、従て人はこの目的の爲めに、鋤鋤の如く又牛馬の如く、只管機械的に活動をなして居るものである、と説く人々を謂ふ。タムスは、この類型に屬する學者として、『一政治經濟學派の教科書』と云はれて居る所の『人口の原理』の著者たるマルサスを擧げてゐる。

タムスが、此の如く學者の二類型を分ち、而してゴド井ンとマルサスを相對立せしめて居るのは、極めて興味ある事柄でなければならぬ。ゴド井ンは所謂空想的社會主義者であつて、人間の意思の無限の發展力を認め、意思は終に何等の物的力を要せずして人間の幸福を左右することが出来る——例へば何等の物質の力を藉らずして、人は自分の健康を意思の儘になすことが出来る——ものと考へた。之に反してマルサスは、所謂個人主義經濟學の有力なる建設者の一人であつて、人類の幸福は、殆ど其の意思には關係なく、たゞ自然の力——人間の播殖力、食物の増加力といふが如き——によつて強制的に左右されるものと考へた。マルサスが其の『人口の原理』に於て——少くとも其の第一版に於て——ゴド井ンに眞正面より反對し、以て世論を沸騰せしめたことは、タムスの親しく目撃したる所であらうが、此等兩學者を夫々其の代表者となす所の兩派——即ち理智的思索家と機械的理論と——を分ち、以て諸々の社會學者經濟學者の系統を根本的に明かならしめたるは、タムスの卓見である。

併し乍らタムス自身は、此等兩派の何れにも屬しないで、寧ろ兩者を共に採用して居る『分配論』(緒言六頁乃至八頁參照)。彼が、人間の理性の發展及び其の威力を認めたことは本文に於て述べたるが如くであるが、而かも他面に、富の分配の平等といふが如きことを主張して、人間の原始的欲望の充足に意を用ひたるは、彼が、人間性の理智的方面と共に其の機械的方面をも併せ觀察したる證據である。

結 論

前三章に於て、余はタムスンの分配論上の根本思想と、この思想の上に立つて觀たる自由競争主義及び相互協力主義の検討とを、紹介し了へた。之を要するに、(一) 彼れの理想は、最大多數の最大幸福即ち功利主義の實現——この理想は、ベンタム主義より彼が得來つたものである——といふことに在つたのであるが、(二) 其の實現の方法として富の分配、而かも其の平等なる分配、といふことを高調したるが爲めに、在來の亚当・スミス、ベンタム流の經濟思想と分離せざるを得ざるに至つた。而して(三) 自由競争主義に基く現代の經濟組織の検討に當つては、タムスンは、此の組織と密接不可離の關係に在る所の、分配の安固——即ち勞働全收——といふ社會的倫理を是認した——其の根本となつた所の思想が、リカド流の勞働價值論に其の源を發して居ることは、既に明かである——が爲め、平等なる安固といふ不徹底なる平等に甘んぜなければならなくなつた。(四) 仍て終に、オウエン主義に彼れの理想實現の可能性を見出して、相互協力の上に立つ社會組織の検討に移つた。唯だ其の實行が果して可能であるかどうかに就ては、未だ明確なる判斷を下してはゐないけれども、彼がゴドキンと共に理性の發展性を認むることによつて、自由主義より相互協力主義への變革が、必ずしも不可能にあらざることを暗示してゐることは、疑を容れない所である。

斯くの如くにして、タムスンの思想の中には、ベンタム、スミス、リカド、オウエン、ゴドキン等の諸々の主義が取入れられてゐる譯であるが、吾々は、一見して全く相容れない所の此等の諸々の主義——然り、スミスやリカドやベンタムは個人主義の又は自由放任主義の主張者で

あるに反し、オウエンやゴドキンは共產主義の主張者であつて、今日では兩者全く相矛盾するものと考へられてゐる——が、タムソンの思想の中を通過し、若くは其の中に存在せることに、奇異の感を懷かしめらるゝであらう。然らばタムスンといふ人は、其の分配論に於ては最初より一貫せる主義主張を有たずして、唯だ漠然と功利主義とか、分配の平等とか、分配の安固とか、いふ思想を無秩序に取入れて、其の何れをも失はざらんとして終に自家撞着に陥つたものであらうか。

成る程、一見すればタムソンの思想は鮮明を缺いで居るやうである。併し乍らかくの如く見ゆるは、タムスンが、資本主義經濟學若くは個人主義經濟學よりして社會主義經濟學が始めて生れ出でんとせる際に在つて、今日資本主義的であると謂はれて居る所の諸々の思想を理解し、之を利用して、終に社會主義經濟學の誕生を助け、且つ其の哺育の任に當つたが爲めであつて、このことは同時に、今日所謂個人主義經濟學と社會主義經濟學とが、其の初期に於て如何に相接近して居たかを、示すものである。今日に於てこそ、此等兩經濟學は氷炭相容れないものであらう。併し乍ら其の分岐の當初に於ては、此等は渾沌として一向に見分けの附かないものであつた。例へば今日、勞働全收權と云はゞ、恰も一派の社會主義者の特有の武器であるかの如く考へられてゐるが、其の源を糺せば、それは勞働價値の議論に胚胎して居り、而かも此の同じ根源よりして、財産權の擁護を主張する學説が生れた、といふが如くである。タムスは、正にこの渾沌たる時代に在つて種々なる思想を研究し、其の取捨選擇を行ふことによつて、社會主義經濟學の成立に

力を致したのである。彼が英國初期の社會主義者の有力なる一人として數へらるゝ所以は、實に茲に存するのである。

以上述ぶる所により、タムスンの思想及び經濟思想史上に於ける彼れの地位が、明かになつたであらうが、後の學者は往々にして全體としてのタムスンの思想を理解せずして、其の一部分のみを捕へて云々する嫌がある。例へば、彼のアントン・メンガーの如き、タムスンの勞働全收權に關する部分の説明のみを重要視して、この思想がタムスンの中心思想であるかの如く考へ、そのオウエン主義に就ては唯だ『オウエンより繼承した所の彼れの共產主義的見解は、彼を妨げて全勞働收益權から現實の論結を抽き出さなかつたのである、』⁴¹⁾といふ風に論じて居るのみである。併し乍ら余惟ふに、タムスンにとつて、勞働全收權即ち分配の安固の思想は、唯だ自由競争の上に立つ經濟組織を是認する限りに於てのみ必要であつたので、オウエン流の相互協力の上に立つ經濟組織を研究せし場合には、此の思想は全然拋棄せられてゐたのである、といふも過言ではなからう。(本論文第三章第二節一及び二参照)。此點に於て余はメンガーと意見を異にせざるを得ない。タムスンの思想の一部分のみを捕へて彼れの思想の全體であるかの如く誤認せしむる他の一例は、彼れの勞働價值論に關する一二の學者の見解である。例へばフレド・ブーク氏は、其の著『社會主義の限界』⁴²⁾に於て、タムスンとマルクスとの關係をリカアド流の勞働價值論に求めてゐるが、前述せる如くタムスンにとつてはリカアド流の勞働價值論は左程の重要さを有たなかつたのみならず、マルクスがタムスンに得たる所のものは、勞働價值論ではなくして、勞働者を知

41) 森戸氏譯近世社會主義思想史九五頁

42) Fred Boucke, The Limit of Socialism, p. 19.

識との問題に關するもの等であつたやうである。⁴³⁾

斯くの如く、タムスンに關しては、未だ正當なる價值判斷が下されてゐないのであるが、余は既に繰返し述ぶる如く、タムスンを以て『功利主義の理想を分配の平等によつて達せんとし、而して個人主義に慊らずしてオウエン主義に其の實現の可能性を見出したる人』であると看做し度い。ツガン・バラノウスキが、其の著『現代社會主義』に於て、

『……現代社會主義の起源に關する歴史は、個人主義と社會主義との全く別樣なる相關關係を示してゐる。斯くて英國社會主義——オウエン及びタムスンを以て其の代表者とする——は、其の哲學的内容に就ては、ベンタムの哲學——哲學的個人主義の最も決定的にして且明晰なる説明の一つである所の——の流れを汲んで居る。タムスンの有名なる著書「分配論」——英國社會主義の最も著明なる理論的產物たる——は、ベンタムの「最大幸福」の原則を經濟學に適用することを主張して居るに過ぎない、』⁴⁴⁾

と言へるは、正鵠を得たる觀察である。

43) Karl Marx, Das Kapital, I, S. 326. (Volksausgabe, S. 308.)

44) Tugan-Baranowsky, Modern Socialism (English translation), (1910), p. 29.